

必修体育クラブ活動の一考察

(昭和51年12月17日受理)

富田 幸博* 佐々木吉蔵*
山田 良樹* 富岡 元信*

1. 調査目的

今日の急激な社会の変化に伴い、学校体育において全人的な人間形成ということが強調されてきた。このため各教科以外の教育活動が改めて考え直されるようになり、その一領域であるクラブ活動が、昭和48年度より必修として教育課程の中に位置づけられた。

以来3年が経過したが未だ教育の現場において

は、多くの困難な問題をかかえているのが現状である。

文部省の示した高等学校学習指導要領の主旨及び内容(表-1)に関して現在、その目的・目標が達成されているかを考えると、現場においては、期待にそえるよう努力はしているものの大半はまだまだといえる。

そこで、本研究においては、各教科以外の教育活動としての必修体育クラブ活動の実態をとらえ

表 - 1

領域	各教科以外の教育活動			
目標	3. 民主的な社会および国家の形成者として必要な資質の基礎を育てる			
基盤	教師と生徒 1 (集団活動)		生徒相互 2 (生活態度)	
内容	ホーム・ルーム	生徒会活動	クラブ活動	学校行事
構成	クラブは、学年やホームルームの所属を離れて共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する。			
活動	人間関係 ・ 自発的 ・ 自治的			
具体的目標	①・人間として相互に尊重し合い友情を深める ・共同生活の充実発展に尽くす態度を養う ②・広く考え公正に判断し誠実に実践する態度を養う ・公民の資質社会連帯の精神 ・自治的な能力の伸長 ③・心身の健康を増進し個性を伸長 ・望ましい生き方を自覚させ将来の生活において自己を実現する能力 ④・健全な趣味や豊かな情操・余暇を活用する態度			
活動内容	・ 勤労を尊重する精神の確立 ・ 体育的な活動 文化的な活動 生産的な活動 ・ 個々の生徒の趣味や特技を育てる活動 ・ 相互に協力して友情を深める			

* 体育管理研究室

ることを主な目的として進めた。

2. 調査方法

イ・対象 全国高等学校（無作為） 1000校

ロ・期間 昭和50年6月20日～9月20日

ハ・調査内容 質問紙によるもので内容は次の通りである。

1. 必修クラブ活動について

- 1 現在必修クラブを実施している
- 2 現在必修クラブを実施していない
- 3 現在必修クラブを準備中である

※以下は実施している学校のみ記入して下さい。

1-1 週単位の実施方法について

- 1 毎週実施している
- 2 隔週に実施している

1-2 実施方法について

- 1 一斉に実施
- 2 曜日または時限を変えて実施
 - イ 学年別
 - ロ 種目別
 - ハ 男女別

1-3 実施の学年構成について

- 1 1年生のみ
- 2 2年生のみ
- 3 3年生のみ
- 4 全 員
- 5 1・2年生のみ
- 6 その他

1-4 実施における時間割について

() 曜日の () 時限目
() 曜日の () 時限目

1-5 実施する施設について

- 1 十分である
- 2 不十分である

2-1 目標について

- 1 生徒の基本的な要求を充足させる
- 2 生徒の個性や伸長に役立たせる
- 3 生徒の創造性や思考力を育成させる
- 4 人間関係について経験させる

5 社会生活に必要な資質を育成させる

6 教師と生徒との人間関係を深めさせる

7 体力を向上させる

8 健康を維持・増進させる

9 個人の種目の技能を習得させる

10 別に目的とか目標はない

3-1 評価の観点について

- | | |
|-------|-------|
| 1 出席 | 5 自主性 |
| 2 体力 | 6 態度 |
| 3 技能 | 7 服装 |
| 4 積極的 | 8 協力 |

3-2 評価の方法について

- 1 100点法
- 2 5段階評価
- 3 3段階評価
- 4 文章によって評価
- 5 出席によって評価
- 6 その他

3-3 評価の記入について

- 1 記入している
- 2 記入していない
- 3 その他

4-1 運動部部員は必修クラブ活動においてどのようになっているか

- 1 運動部と違った必修クラブに入部する
- 2 運動部と同様の必修クラブにも入部ができる
- 3 その他

4-2 運動部と必修クラブ活動との担任の関係について

- 1 同一の種目を担当
- 2 運動部と違った種目を担当
- 3 別に決めていない

ニ・回収率 回収率は578校（公立480校・私立98校）で57.8%であった。

以上の回収校を、公立校と私立校に分けて考察してみようと思いましたが、私立校の回収率が少なかった為、全体

的に考察致しました。

3. 結果と考察

1. 必修クラブ活動の実態

(1) 必修クラブ活動について

必修クラブ活動の現状については表-2に示す通りである。

表-2 必修クラブ活動について

1	現在必修クラブを実施している	463校	80.1%
2	現在必修クラブを実施していない	99校	17.1%
3	現在必修クラブを準備中である	16校	2.8%

必修クラブ活動については80.1%の学校が「現在必修クラブを実施している」と回答している。

「現在必修クラブを実施していない」・「現在必修クラブを準備中である」と回答している学校が19.9%の割合を示している。

割合としては高いとはいえないが、各教科以外の教育活動のあるべき姿として考えると調査において19.9%もあったことは意外な結果であった。

必修クラブ活動を実施している学校(463校)を対象として実施方法・目標・評価方法などについて示す次のようになる。

2. 必修クラブ活動の実施の実態

(1) 週単位の実施方法について

必修クラブを実施している学校において、「毎週実施している」「隔週に実施している」という質問に対し表-3のような回答が示された。

「毎週実施している」と答えた学校が95.2%と高い割合が示されたことは、ほとんどの学校で原則として週当たり1単位時間を下らないで実施が行われていると考えられる。

「隔週に実施している」と答えた学校の割合が4.1%と低いとはいえ、毎週実施することができずやむなく隔週に実施している学校の実態を考える必要がある。

表-3 週単位の実施方法について

1	毎週実施している	441校	95.2%
2	隔週に実施している	19校	4.1%
	無記入	3校	0.7%

表-4 実施方法について

1	一斉に実施				416校	89.8%
2	曜日または時限を変えて実施				44校	9.5%
	イ	学年別	20校	ロ	種目別	16校
	ハ	男女別	0校	ニ	無回答	8校
	無記入				3校	0.7%

(2) 実施方法について

実施方法において、「一斉に実施」「曜日または時限を変えて実施」という質問に対して表-4のような回答がえられた。

「一斉に実施」と回答した学校が89.8%であり、「曜日または時限を変えて実施」と回答した学校が9.5%であった。曜日または時限を変えて実施の内訳は「学年別」20校・「種目別」16校・「男女別」0校・「無回答」8校であった。

一斉に実施している学校の割合が最も多く示されたことは計画上、その目標が重要視されていると考えることができるであろう。

実施にあたって、施設設備の実態、指導に当たる教師の有無、生徒の希望、男女の構成などを考慮し、やむなく曜日または時限を変えて実施している学校の実態も考える必要がある。

(3) 実施の学年構成について

表-5 実施の学年構成について

1	1年生のみ	17校	3.7%
2	2年生のみ	0校	
3	3年生のみ	0校	
4	全 員	400校	86.4%
5	1・2年生のみ	32校	6.9%
6	その他	14校	3.0%

必修体育クラブ活動の一考察

実施の学年構成については表-5に示す通りである。

実施の学年構成は、「全員」参加が86.4%で最も多く、次いで「1・2年生のみ」参加というのが6.9%、「1年生のみ」というのが3.7%の順であった。

「クラブは、学年やホーム・ルームの所属を離れて共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する」ことより、全員参加の割合が最も多く示されたことは、必修クラブ活動において「全人的な人間形成」が実施されているといえるであろう。

(4) 実施における時間割について

時間割については、「毎週実施している」「隔週に実施している」「一斉に実施している」「曜日または時限を変えて実施している」にかかわらず記載していただいた。

その結果は表-6に示す通りである。

曜日としては、「水曜日」が142校で最も多く、次いで、「木曜日」というのが133校「金曜日」というのが89校の順であった。

表-6 実施における時間割について

時 限 曜 日	1	2	3	4	5	6	7	合計
月	1		1	12	5	20	5	44
火			1	14	7	30	22	74
水	1		6	20	14	80	21	142
木	1		7	24	15	59	27	133
金			1	24	8	35	21	89
土	2	2	4	23				31
合計	5	2	20	117	49	224	96	513

時限としては、「6時限」が224校で最も多く、次いで、「4時限」というのが117校「7時限」というのが96校の順であった。

曜日と時限の関係は、「水曜日」の「6時限」が80校であり、「木曜日」の「6時限」が59校の順であった。

なお、調査結果を普通校と職業校に分けて詳細に観察すると普通校では7時限に実施されているのがかなり多くあった。職業校では1時限に実施しているのが見られた。

(5) 実施する施設について

施設において、「十分である」「不十分である」という質問に対し表-7のような回答が示された。

「十分である」と答えた学校が13.8%と少なく、

「不十分である」と答えた学校が85.5%と高い割合が示された。

表-7 実施する施設について

1	十分である	64校	13.8%
2	不十分である	396校	85.5%
	無記入	3校	0.7%

不十分であると答えた学校が多くあったことに
対し調査する際、運動場、体育館、コート、教室
等の項目をもうけ活用できる施設としての数や大
きさを知る必要があったことに反省を持った。

3. 目標の実態

目標についての質問に対して、10項目中該当する項目をすべて選択とした。

結果は表-8に示す通りである。

「生徒の個性や伸長に役立たせる」が255校で

表-8 目標について

1	生徒の基本的な要求を充足させる	83校	6	教師と生徒との人間関係を深めさせる	246校
2	生徒の個性や伸長に役立たせる	255校	7	体力を向上させる	104校
3	生徒の創造性や思考力を育成させる	178校	8	健康を維持・増進させる	145校
4	人間関係について経験させる	231校	9	個人の種目の技能を習得させる	49校
5	社会生活に必要な資質を育成させる	102校	10	別に目的とか目標はない	23校

最も多く、次いで「教師と生徒との人間関係を深めさせる」が246校・「人間関係について経験させる」が231校の順に示された。

「体力を向上させる」「個人の種目の技能を習得させる」と答えた学校数が少なかったことは予想外の結果であった。

また、「別に目的とか目標はない」学校が23校と数字的には少ないが示された。

4. 評価に関する実態

(1) 評価の観点について

評価の観点については8項目中該当する項目をすべて選択することとした。

結果は表-9に示す通りである。

表-9 評価の観点について

1	出席	268校	5	自主性	114校
2	体力	11校	6	態度	145校
3	技能	40校	7	服装	32校
4	積極的	96校	8	協力	84校

「出席」が268校で最も多く、次いで「態度」が145校・「自主性」が114校の順に示された。

出席と答えた学校が一番多くあったことは健康管理・安全管理などを考慮したものであろう。だが、必修クラブ活動が「出席」することだけで、評価として取り扱われているとすれば今後の重要な課題といえるであろう。

(2) 評価の方法について

評価の方法については表-10に示す通りである。

「出席によって評価」が139校で最も多く次いで「文章によって評価」が100校の順であった。

評価をしている学校が全体で341校(73.7%)と示されたことは、各学校に即した形で評価がなされているといえる。中でも、「出席によって評価」が最も多くあったことは、評価の観点でも述べた通りである。

無記入が122校あったことは、評価の方法に対しなんらかの問題点をもっているものといえるだろう。

評価の観点・評価の方法については、今後の調査の必要性をかんずるとともに調査項目についても反省を持った。

表-10 評価の方法について

1	100点法	7校	73.7%
2	5段階評価	18校	
3	3段階評価	29校	
4	文章によって評価	100校	
5	出席によって評価	139校	
6	その他	48校	
無記入		122校	26.3%

表-11 評価の記入について

1	記入している	129校	41.5%
2	記入していない	233校	50.3%
3	その他	27校	5.8%
無記入		11校	2.4%

(3) 評価の記入について

評価の記入については表-11に示す通りである。評価の記入については、「記入している」と回答した学校が41.5%、「記入していない」と回答した学校が50.3%の割合で示された。なんらかの形で評価はなされているものの記録として保存されていないのが現実といえるであろう。

よって、すべての教育活動が指導計画の立案、それに基づく実施、その結果の評価と3つの教育活動を適切に繰り返して展開されることが必要であることより、今後、評価を実施するだけでなく、記録として保存されることが望ましいであろう。

5. 運動部と必修体育クラブ活動の関係について

(1) 運動部部員は必修クラブ活動においてどのようなになっているか。

運動部部員は必修クラブ活動においてどのようなになっているかは表-12に示す通りである。

生徒の入部については、「運動部と違った必修

クラブに入部する」と回答した学校が9.1%、「運動部と同様の必修クラブにも入部ができる」と回答した学校が76.5%の割合で示された。

大半の学校においては、部活動と同様の必修クラブ活動を選んでいる生徒が多くいるものと考えられる。

よって、部活動において文化部を選択あるいは入部していない生徒と、必修クラブ活動において文化的な活動・生産的な活動を選択した生徒の中で、正課体育以外に1度も体育活動を行ったことのない生徒を、いかにして体育的な活動へ自主的・自発的・積極的に参加させるかが今後の重要な課題であろう。

表-12 運動部部員は必修クラブ活動においてどのようにしているか

1	運動部と違った必修クラブに入部する	42校	9.1%
2	運動部と同様の必修クラブにも入部できる	354	76.5
3	その他	58	12.5
	無 記 入	9	1.9

表-13 運動部と必修クラブ活動との担任の関係について

1	同一の種目を担当	138校	29.8%
2	運動部と違った種目を担当	51校	11.0%
3	別に決めていない	265校	57.3%
	無 記 入	9校	1.9%

(2) 運動部と必修クラブ活動との担任の関係について

運動部と必修クラブ活動との担任の関係については表-13に示す通りである。

「別に決めていない」と回答した学校が57.3%で最も多く、次いで「同一の種目を担当」と回答した学校が29.8%・「運動部と違った種目を担当」と回答した学校が11.0%の割合であった。

「別に決めていない」学校が半数以上の割合が示されたことは、予想外の結果であり今後担任を決定するさいの課題といえる。

まとめ

各教科以外の教育活動としての必修体育クラブ活動の実態をとらえることを主な目的として報告を試みた。

全体的にみて学習指導要領に示された形で各学校に即して運営がなされているといえよう。

しかし、そこには、つきにかけるような数多くの研究問題が存在しているといえる。

① 3年間で過ぎててもいまだ実施がなされていない学校があること。

② 週当たり1単位時間の実施もできず、やむなく隔週に実施している学校があること。

③ 一斉に実施できず、曜日または時限を変えて実施している学校については、施設設備・教職員の有無などに問題があるのであろうか。

④ 各教科以外の教育活動として取り扱っているにもかかわらず、目的とか目標がなく実施されている学校があることはどうであろうか。

⑤ 評価において、出席を重視するあまり体力、技能などの評価を軽視する学校が多いこと。

⑥ 正課体育以外に1度も体育活動を行ったことのない生徒をいかにして、体育的な活動へ自主的・自発的・積極的に参加させるかについての研究がなされなければならないであろう。

今後上記の諸問題について、その解決に関して研究をすすめたいと考える。

以上が今回の調査結果であるが、今回の調査では、必修体育クラブ活動を対象としたもので、全般について述べることはできなかった。しかし、学校における必修体育クラブ活動の現状を知る1つの手がかりとなるものと考ええる。

参考文献

1. 高等学校学習指導要領；昭和45年 文部省
2. 体育・スポーツ法令便覧；昭和50年 佐々木吉蔵 第一法規
3. 健康と体力；昭和48年8月号 第一法規
4. 健康と体力；昭和49年4月号 第一法規
5. 体育科教育；昭和48年12月号 大修館書店
6. 体育の科学；昭和48年3月号 日本体育学会 編集

7. これからのクラブ活動；昭和47年 佐々木吉蔵・長沼 誠 帝国地方行政学会
8. 学校体育；昭和47年 日本体育社
9. 学校体育；昭和48年10月臨時増刊 日本体育社
10. 学校体育；昭和50年 5月号 日本体育社
11. 学校体育；昭和50年11月号 日本体育社
12. 日本体育学会第25回大会号 昭和49年
日本体育学会第26回大会号 昭和50年
13. 高等学校必修クラブ活動の指導 昭和47年 3月号

愛知県教育委員会学校教育課

A STUDY ON COMPULSORY PHYSICAL EDUCATION CLUB ACTIVITIES

by

Y. Tomita, K. Sasaki, Y. Yamada and M. Tomioka

With rapid changes in society, physical education has come to put more stress on the formation of an individual as a whole personality. Consequently, extracurricular activities have been taken into reconsideration.

Club activities, one of the most important parts of extracurricular activities, became compulsory from the school year 1973. Three years have passed since, and there are still some difficult problems to be solved on the side of actual teaching staff.

In view of the spirit (purpose) and content of the Course of Study given by the Ministry of Education, the present stage is not satisfactory, although we can find some efforts to desirable effect. In this study, therefore, we made it our aim to investigate the actual conditions of compulsory physical education clubs as a part of extracurricular programs.